

2025年6月17日

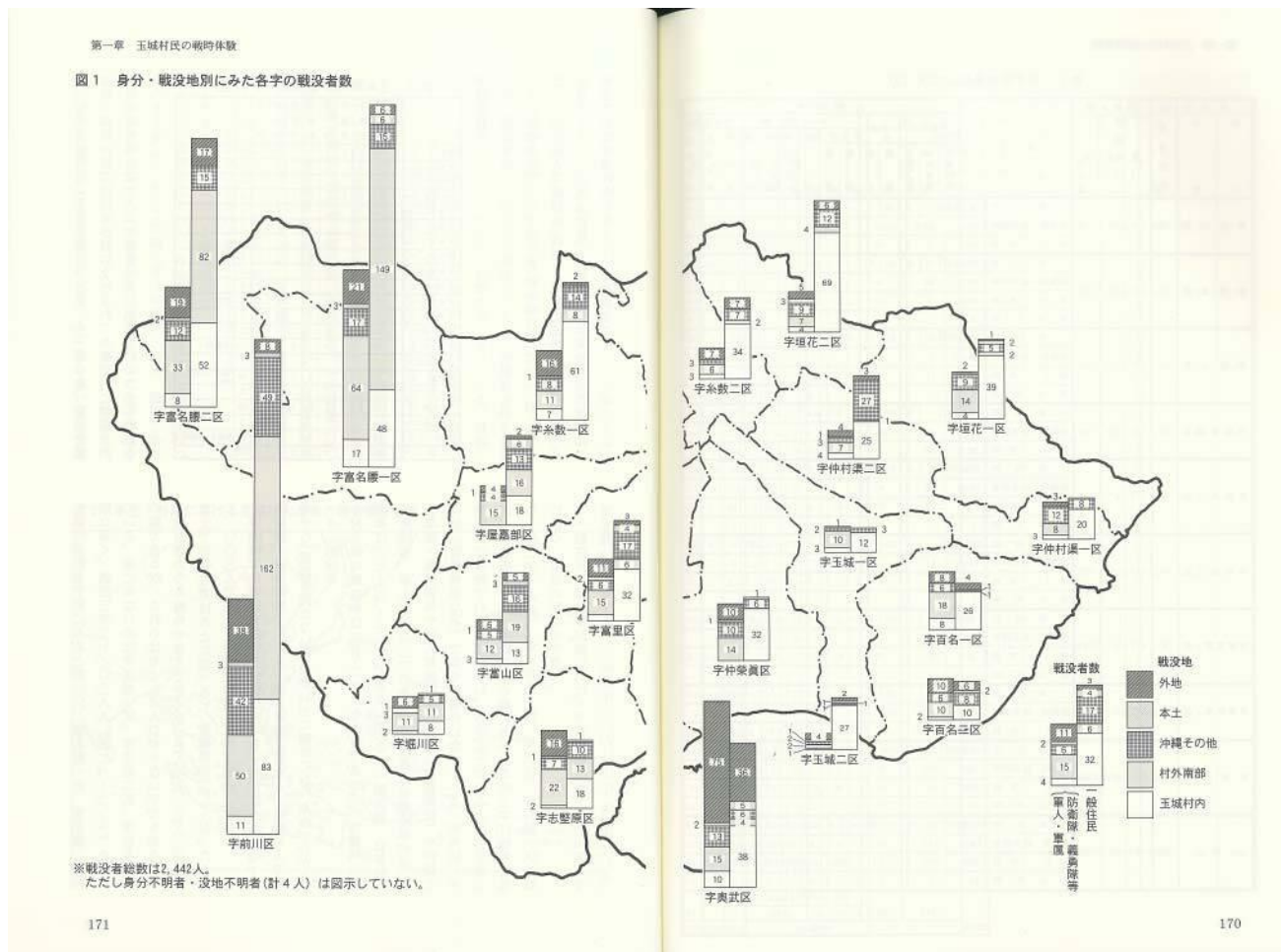
船越小学校区の人々は沖縄戦をどのように生き延びたのか

一湧上 洋さんの戦争体験から考えよう

4年 組 番
名前

南城市玉城の人々は、いつどこでなくなったのか

地図をみて、沖縄戦で亡くなった一般住民が多い集落ベスト3をあげてみましょう。



- 1位 () 集落
- 2位 () 集落
- 3位 () 集落

どこで亡くなった人が多かったですか。()

船越小校区である船越（^{ふなこし}富名腰1区）、愛地（^{ふなこし}富名腰2区）、前川の人たちの死亡率が、他の玉城地域よりも高いことに気づいたと思います。どうして、たくさんの人がなくなったのでしょうか。また、どのように^いに^の生き延びたのでしょうか。

今日は、船越に住む湧上 洋さんの体験を読み、沖縄戦当時の船越の様子、湧上洋さんはどのように^いに^の生き延びたのかを考えましょう。湧上洋さんは、小学校5年生の時に、沖縄戦を体験された方です。



洋さんの学校生活と兵隊との交流

私は、^{たまぐすくこくみんがっこう}玉城国民学校（^{げんたまぐすくしょうがっこう}現玉城小学校）に通っていた。小学校3年くらいから戦争がきびしくなり、戦争にむかっていく教育（^{ぐんこくきょういく}軍国教育）になっていくのを実感した。学校でも敵の爆撃を想定した防火訓練が行われた。水が出るところに^{いちれつ}一列に^{なら}並んで、バケツリレーをした覚えがある。竹やり訓練もあった。アメリカは敵で怖い存在だと教えられていた。戦争には勝つんだという気持ちはあった。

日本兵と一緒に、家の庭で写真をとったこともある。家に訪ねてきたときに記念に写真をとった。この岩間さんは、2、3度家に来て食事したり話をしたりした。最初に^{ちゅうとん}駐屯した^{たけぶたい}武部隊の^{へいたい}兵隊だった。住民に対する接し方もやさしかった。この兵隊は生き残って、戦後この写真を届けてくれた。



岩間俊憲軍曹（武部隊）とともに、（左より筆者、湧上久、泉則雄。昭和19年）

^{べいぐん}米軍の攻撃がはじまった

当時の私の家族は、^{そふ}祖父母、父母、八歳の弟、五歳と二歳の妹、三歳の叔父および私の9人であった。しかし三月になると、小学校の教師だった父は^{ぼうえいたい}防衛隊に^{しょうしゅう}召集されて^{まえかわく}前川区大道の民家にいたので、家にいる家族は8人であった。

米軍が最初に^{ゆうこく}港川沖から艦砲射撃を開始した3月24日の夕刻、私たち家族は父の手配で軍のトラックに^{とちゅう}途中の^{ごや}胡屋（^{げんおきなわし}現沖縄市）まで乗せてもらい、^{たまぐすくそんみん}玉城村民の疎開先の^{きんそん}金武村（^{げんぎのざそん}現宜野座村）^{ひなんさき}漢那へ避難した。しかし避難先に^{しょくりょう}食糧の^{びちく}備蓄が少ないことを知り、祖父と正志と私の3人は^{ふなこし}富名腰へ戻ってきた。^{ふなこし}富名腰に戻った私たち3人は、家から300メートル前方の山の^{はちごうめ}八合目にある^{ごう}壕での生活が始まった。最初の頃、^{ふなこし}富名腰への^{かん}艦

このあたりに壕をつくっていた



砲弾の飛来や空襲は殆どなかった。

しかし、父の所属する部隊が前線(那覇)へ移動した4月下旬になると、前線近くの中城、西原方面の住民や首里、那覇の住民が富名腰に避難してくるようになり、それに伴ってトンボの形をした米軍の偵察機が上空を飛び、周辺にも艦砲弾が飛来し、空襲も行われるようになった。

父は、前線へ出勤することを告げに来たとき、祖父に対して、「この戦争に勝ち目はないので、近くまで米兵が攻めてきても絶対に壕から逃げないこと。たとえ捕えられても、決して米兵は殺すことをしないから。」といって立ち去った。

船越がだんだんと火の海に

5月初旬頃になると、富名腰に逃げてくる避難民の数が急激に増加し、トンボ(偵察機)が頻繁に上空を飛ぶようになっていった。

富名腰区の家が破壊され、炎上したのは5月の中旬頃であった。トンボ(偵察機)と入れ替わりに爆撃機2機が富名腰二区(現愛地区)の北側方向から飛来し、集落の西側に爆弾と焼夷弾を投下したのである。爆撃機が急降下するたびに落下した爆弾が轟音を発して炸裂し、建物の屋根や樹木の枝等が空高く舞い上がっていた。そして焼夷弾にあたった茅葺きの家々が次々燃え上がり、一帯は瞬く間に火の海となっていき、夜遅くまで火災は続いた。

またその頃から、首里・那覇や運玉森一帯(与那原のあたり)で激戦が続いているらしく、高台にあった私たちの壕から連日連夜砲弾の飛び交う様子が遠望できた。そして壕から200メートルほど離れた村道(船越から前川へと行く道)を通して島尻南部へ移動して行く避難民の姿が見られるようになった。移動する避難民の上空には時々トンボ(偵察機)が飛んでいたが、最初の頃は何事も起こらなかった。

ところが5月下旬頃になると、移動して行く避難民の数も多くなり、避難民の中に前線から撤退する兵隊も加わるようになった。すると、トンボ(偵察機)が絶えず飛び、米軍の戦闘機が機銃掃射をするようになった。戦闘機は機銃掃射を四回ほど繰り返した後に立ち去ったが、至る所に多数の死傷者が倒れていた。

とどまるか、避難するか、家族の葛藤

5月末頃になると、大里城址一帯で激しい攻防戦が展開されているらしく、私たちの壕からは、砲弾の飛び交うのが見られ、砲弾の炸裂音が聞こえた。しかし、攻防戦は四日ほどで終わったらしく、その後は小銃や機関銃の発射音が散発的に聞こえるだけになり、その音も大里城址一帯から稲福集落方面へ徐々に移動して聞こえてきた。その頃になると、島尻

なんぶ いどう ひなんみん かす そうか となりむら いなふくく おおしろく そふ ちじんかぞく
南部に移動していく避難民の数もさらに増加し、隣村の稲福区や大城区の祖父の知人家族
もいたと、避難民からの情報を得るために時々道に下りていた祖父が話していた。

6月に入ると、移動する避難民の中に富名腰区民も多数いて、祖父は一緒に避難するよう
誘われたという。しかし、祖父は移動していく区民に対して、「間もなく米軍の総攻撃が行
われようとしている島尻南部へ行くより、自分たちの壕が安全だよ。」といて壕に留まる
ことを勧めたと話していた。また、祖父の忠告を守って隣の軍の陣地壕に留まっていた
避難民達も、下の村道を移動して行く避難民に刺激されて壕から出ていってしまった。



6月3日、朝から機関銃と小銃の発射音が糸数イーバール帯から聞こえるようになり、
下の村道は逃げていく避難民であふれていた。しかし、上空を飛ぶトンボ（偵察機）は見ら
れたが、艦砲弾の飛来もなく、戦闘機の機銃掃射もなかった。移動していく避難民は正午頃
から少なくなり、3時頃になると殆ど見られなくなった。私たち家族だけが取り残されて
しまったのである。

私は不安になってしょうがないので、幾度となく島尻南部に逃げていくことを祖父に訴
えた。しかし、祖父は、「心配するな」とだけ言って、私のいうことを無視した。私たち家
族だけ取り残された淋しさと不安で、とうとう私はすっかり打ち沈んでしまい、壕の中で縮
こまってしまった。

6時頃になって壕の外にいた祖父に呼ば
れ、私と正志が壕の外に出てみると、祖父は
「米軍の斥候兵がウフモーまで来ている
よ。」といて集落の西の方を指差した。よ
く見ると、5、6人の米兵が1キロ先のウフ
モー製糖場周辺をゆっくり歩いていた。そ
の様子を見た私はますます不安になり、頑
なに壕から逃げるのを拒んでいる祖父が恨めし
く思えてならなかった。



考えてみよう あなたが洋さんだったら

6月3日、とうとう船越集落にも米兵の姿が見られるようになりました。まわりの人たちは、多くが島尻南部に避難し湧上さん一家は取り残されています。もしあなたが湧上洋さんだったらどうしますか？下の①から③の中から選んで、その理由を書きましょう。

①祖父のいう通り、このまま壕にとどまる

②南部に避難しようと祖父を説得する

③その他（ ）

選んだ理由

今日の授業をうけて、疑問に思ったこと、もっと知りたいと思ったことを書きましょう。

4年 組 番
名前

湧上洋さん一家のその後

その日の夕食は明るいうちにとった。すると、食事の途中、いきなり軍服姿の人が壕の入り口に現れたのである。よく見ると軍服姿の人は紛れもなく父であった。私は父の顔を見るなり、不安な気持ちは一度に消えてしまったのである。

父の話では、部隊は真和志村安里の戦線に投入させられ、度重なる白兵戦で配下の防衛隊員からも多くの死傷者が出たという。そして6月2日に具志頭村安里へ撤退し、3日の今日、糧秣運搬を命じられて隊員7人と一緒に艦砲弾の飛来するなかをメーヌモーヘ来たという。糧秣運搬を命じられた時、上官より無理しては戻るなといわれたこともあり、父は覚悟を決めて隊員を解散させて家族の元に帰し、自らも家族を一目見てから帰隊しようとして、私たちの壕に立ち寄ったとのことであった。

ところが、しばらくして父が壕を出ていこうとすると、祖父が父の手を掴んで出て行くのを遮り、手榴弾まで奪ってしまった。父が、「防衛隊の責任者である自分は部隊に戻らなければならない。」というのに対し、祖父は、「勝ち目のない戦争で、部隊に戻る必要はない。」と言い返し、「どうしても戻るとあれば、手榴弾で自分たちを殺してから出て行け。」とまで言って壕から出ていこうとする父を必死になって止めていた。20分ほど言い合った後、父は祖父の気迫に負けてしまい、部隊に戻るのを断念して靴を脱いで壕の中に上がった。

父は軍服を祖父の着物に着替え、軍服、巻脚絆、軍靴、軍帽および手榴弾等、軍に関係するものを壕の奥の床下に隠し、一緒に夕食をとったのである。その日の晩は、いつも蚤やしらみの痒みで絶えず目を覚ますのに、側に寝ている父に安心して朝までぐっすり寝ることが出来た。

米軍の捕虜に

翌6月4日の朝、父と祖父の話し声で目が覚めた。下の村道は銃を持った米兵で一杯し、山に向かって前進中という。ところが、到着予定時間過ぎても現れないので、祖父が外の様子を見に壕を出た。数分後あわてて戻ってきた祖父は、「米兵は壕の上の山まで登っていた。」という。しばらくして、祖父に気づいた米兵達が壕の前に現れ、私たちに声をかけたので、私たち家族は祖父を先頭に手を上げて壕から出た。壕入口の両側には迷彩色の軍服を着た4人の米兵が私達に銃を向けて立っていた。最後に父が出ると広場にいた他の7、8人の兵隊までも駆け寄って、今にも銃を発射しようとした。その間私は、顔は恐怖で引きつり、体は震えていた。父は何かを言って頻りに米兵達に訴えていたが、父の言っていることが分かったらしく、囲みを緩めた。後に父の話では「自分は学校の先生であり、兵隊ではない。」と片言の英語で訴えたという。

この様にして私たち家族は捕虜となり、知念村知念に収容された。ちなみに、やんばるに疎開していた家族も皆無事に捕虜となり、金武村（現宜野座村）惣慶に収容されていた。